

平成 29 年 12 月 14 日

# 留学報告書

平井 拓磨

## 秋学期を振り返って

アメリカで暮らしてから早三ヶ月、少年老い易く学成り難しとはよく言ったものであつたという間に過ぎてしまった。様々な方の力をお借りして、早くからこちらの生活に馴染むことができ友人にも恵まれ充実した学生生活を送れている。途中、時差ボケを引きずって生活リズムがおかしくなったり、若干体調を崩してしまったりした事もあつたが今ではなんの支障もなく生活できている。一方、こちらの授業では扱う内容や講義自体は難しくないが、発言を多く求められたり課題の量が日本とは比較にならない程多かたりするなど苦勞する場面も多く、思うように授業に追い付けなかったというのが正直な感想だ。授業を受ける中で感じたのはアメリカらしい自己責任主義と個人主義である。元々アメリカの大学の授業のイメージでは自分の意見を生徒が自主的に発言し、議論の中で親交を深めていくというものであつた。それはある程度において合っており、間違ってもいた。確かに授業中、生徒は矢継ぎ早に挙手し自らの意見を早口にまくし立てており授業のほとんどがディベートだったのでと感ずるほどであつた。しかし、授業が終わった途端先ほどまで熱い議論を交わしていたのはどこへやら、初授業であつても挨拶一つ交わさず目すら合わせずに帰っていくのだ。

日本とほとんど変わらない生活様式や食生活を持つアメリカにおいて何も考えずに過ごしていたらカルチャー・ショックというものに遭遇するのは難しいだろう。せいぜい、土足のままベッドに飛び込むだの、牛乳がガロン単位で売っている程度であろう。しかし、言葉の節々や考え方の根底を探ればやはり完全に同じ文化ではないということがわかる。アメリカという巨大で多彩な国を所詮アウトサイダーである一留学生がたかだか数ヶ月過ごただけで真理を知ったつもりになるのは非常に滑稽であることは重々承知の上で、これまでの自分の体験を踏まえた自分なりのアメリカ観、西洋文明観を拙い文章で書いていきたい。

## 普遍主義と文化相対主義

ある日の授業で EU 圏出身の生徒が、アジアではいまだに死刑制度を存続させており大変非人道的で嘆かわしいと発言して、アメリカ人の生徒も賛同しアメリカでも全廃するべきだと主張した。ここで自分は大人数を殺害した犯罪者が死を持って償うのは当然であるし、東南ア

アジアや中国ではカリフォルニアでは合法の麻薬関連で死刑になることもあると発言した途端、教室にはブーイングの嵐で馬鹿馬鹿しいといわれてしまった。後日、再び非常に似た体験をした。各国の留学生と食事をしているとき、それぞれの国の変わった料理についての話になり日本のクジラ、イルカ料理について質問された。自分自身クジラを数回食べたことがある程度だったのでよくわからなかったが一部の地域では伝統料理として残っていると説明した所、やや呆れ混じりの渋い表情をされた。

これらの根底にあるのは人権、自由といったヨーロッパ発の倫理観を世界のどこでも適用できる普遍的なものであると捉える普遍主義ではないかと考えた。一般的にアメリカにおける普遍主義はかつての国是、「マニフェスト・デスティニー」という言葉で知られている。今ではネオコンが他国の独裁政権を打倒する時しか使われない死語であるが、いわゆるリベラル層の根底にもこの考え方は流れているのだと強く感じた。近年、これに対峙する立場にあるのがヒスパニックやイスラーム教徒といったヨーロッパとは異なる文化を持つ人々だ。彼らを文化的に同化させるのではなく、彼らの文化をいかに尊重できるか、そして社会的に包摂できるかがこれまで文化相対主義を採ってこなかったアメリカの課題であろう。現政権を筆頭としてこれらの人々を警戒し、攻撃する人も多いがそれはただの人種差別という単純な構図ではないだろう。21世紀は文明の衝突の世紀であると言われていたが、西洋文明の総本山であるアメリカでもその縮図が垣間見えるのは非常に興味深い。

## 自主的セグレーションとリベラルの意味の変容

アメリカで生活する中で気づいたのが、アメリカ人は同じ人種同士で固まって行動することが非常に多いということだ。アフリカ系はアフリカ系と、白人は白人と、ヒスパニックはヒスパニックと、といったところだ。ある日思い切ってルームメイトに尋ねたところ、特に理由はないが実際の傾向は多々見られるとのことであった。もちろん現在のアメリカにはセグレーション、つまり人種隔離的な政策は存在しない。しかし、乱立する〇〇人コミュニティやなぜか白人ばかりが出演するFOX ニュースなどを見たら自主的に隔離しているのではないかとさえ考えてしまう。ルームメイトのイギリス人の目にもこれは奇妙に映ったらしく、イギリスでは人種ごとのコミュニティは存在しないため黒人なまりというものも存在しないという。逆に有色人種なども関係なく上流階級に上がることができ、時に貧困層の白人が馬鹿にされるなどの逆転現象も起こるほど人種差別とは訣別した国になっていると彼は語っていた。

無論、人種差別はその痛々しい歴史を振り返るに到底容認できるものではないだろう。しかし、現在のアメリカにはかつてそのような人種差別などから弱者を庇う理念であったはずのリベラルの意味が変容しているのではないかと感じることもある。それはリベラルたることがエリート階層の知的ヘゲモニー獲得の競争基準であるかのような風潮が多々見られるのである。前述の歪んだ多様性をいかに擁護しているか、どれほど強い口調で“人種差別主義者”を罵れるかをまるで競っているかのような言動を毎日のように耳にする。彼らにとって一度でも“人種差別主義者”のレッテルを貼られた者の言葉は聞くに値せず全く無視される。南部や中部などの

白人が多い地域は賃金も低く決して強者というわけではないだろう。しかし、彼らは白人、共和党支持者というだけで侮蔑、聞くに値しない存在として扱われている。そんな彼らの立場を代弁し、熱狂的支持を取り付けたのがドナルド・トランプである。トランプを情動的に非難するのは簡単であるが、その背景にあるものを考察しなければ第二、第三のトランプを生み続けるだけであろう。

## 明るい未来を信じるアメリカらしさ

これまで散々アメリカ社会の負の面ばかりあげつらってきたが、もちろんいい点がなかったわけではない。ヒスパニック系の元不法移民の友人宅でホームパーティーをした時、ヒスパニック系の青年が「今は決していい時代ではないけども、これは明るい未来を迎えるための助走なんだよ」と語っていたのが非常に心に残っている。そこはお世辞にも立派とは言えないどころか、これまで見た家の中でもダントツにボロい家ではあったものの希望を捨てずにアメリカでより良い暮らしをしようとひたむきに努力する人々と出会い、これがアメリカの推進力なのだと強く感じた。まだまだ留学期間は半年残っておりますがこれからもアメリカの清濁ともに学び、これからの人生の糧にしたいと考えております。